

狭山の森から

—— オオタカ密猟監視報告 ——

オオタカ密猟対策委員会

はじめに

狭山丘陵は、朝日新聞社と森林文化協会の「21世紀に残したい日本の自然100選」にも選ばれた、東京近郊に残された数少ない豊かな自然である。1都1県にまたがるこの丘陵にオオタカは生息する。毎年そのオオタカは巣を造り産卵するが、1978年から82年までの間、ひなの巣立ちは確認されていない。オオタカ密猟対策委員会の保護活動は、第1に狭山丘陵のオオタカの巣を守り無事にひなを巣立たせる事、第2に本活動を通じて自然保護活動の重要性を世論に訴える事、そして第3にこの活動を通じ行政の自然保護に対する姿勢を是正すべく働きかける事を目的として、1982年から組織的に開始された。

1. 活動内容と成果

1982年に、狭山丘陵のオオタカを護ろうと一般市民が立ち上がり、朝日新聞で監視活動に参加してくれるボランティアを募り、オオタカ密猟対策協議会が発足し活動を開始した。しかしこの年は、営巣確認迄に至ったものの、何らかの原因で親鳥が巣を放棄してしまい、協議会の活動は中断した。翌1983年、この年のオオタカ密猟対策についての会合が開かれ、オオタカ密猟対策委員会が新たに発足して、活動の第一歩が踏み出された。とはいっても最初からスムーズに活動を進められるわけではなく、その監視方法は試行錯誤を繰り返した。絶滅の危機にひんし、特殊鳥類にも指定されているオオタカが密猟者の手によりその繁殖を妨害されていることを知り、「許セヌ」と思い集ったのはいいが、「24時間の監視を交替でテントに詰めて行ない、オオタカを守ってやろう」ぐらいの軽い気持ちで臨んだメンバーの前に数々の問題が持ちあがってきた。テントはどうするのか？ 水や食糧は？ 誰が何時入る？ 監視の方法は？ など、とにかく数えきれない程だった。ガスも電気も水道もなく町まで歩いて約45分、夜になれば丘陵は全く隔離された世界になってしまう。テントを借り、時間が自由になる人をかき集め、どうにか恰好がついたのが5月半ば頃、4月頃から進めてきた各方面への協力依頼も済んで手さぐりの活動が始まった。参加したボ

ランティアは公務員、サラリーマン、学生、教員、主婦、無職などと実に様々で、監視が滞りなく進められていく上で必要な活動、例えばボランティア間の連絡、キャンプ集め、事務処理、交替制で行われた24時間監視のローテーション作りなどが順次進められていった。オオタカの繁殖期は3月上旬の造巢に始まり7月の巢立ちまでであるが、この間本州以南では梅雨があり、特に山の中では霧雨のベールがあたりを全て包みこんでしまい、輝く太陽を見ることは滅多にない。多湿のため、体中がベトつき、妙に寒気がする。2日も風呂に入らないと、背中にカビが生えてくるような感じになる。もともとテントは何カ月も居住するには作られていないから、快適なはずがない。この時期何人かの監視員の顔には憂うつさが漂った。しかしここでボランティアの団結が乱れてしまえば翌年以降の活動が危ぶまれるとして、テント撤収までの間、ボランティア全体の結束を乱さぬ努力が続けられた。

狭山丘陵ではもうひとつ厄介な事がある。地質が関東ローム層、つまり赤土なので粒子が非常に細かく、その表面が踏み固められると磨いた玉のようになってしまう。濡れると実によくすべり、一度転ぼうものなら衣服の目にすりこまれて、まるで赤茶色のペンキをひっかけられたようになる。本部テントから営巣木まで行くには谷を降りなければならないが、その途中で被害者が続出した。そこでロープを張り、これに頼って登り降りしたのだが、色々試したあげく、ゴム長をはき、ミニアイゼンを付けるのがよいことがわかった。山で生活する為には心意気だけでなく様々な知識や技術が必要なのである。

オオタカのひなを密猟者の手から守るにあたり、監視方法はどうか、という問題がまず我々の頭を悩ませた。監視員数名が営巣木のすぐ近くに常駐し、24時間体制で見張るという方法がまず考えられたが、地形がそれを許さないことと、営巣木から近すぎることを考え断念した。番犬という案も出たが、これから子育てをしようというタカにはあまりに刺激が強い。そこで警報装置を使うことになったのだが、これにあたっては鷲の紋章が社章になっている総合警備保障株式会社が営業活動とは無関係にオオタカ保護のため協力して下さる運びとなった。同社はビルや家屋の内部を守るのが専門なので、風雨のあたる屋外、それも電気のない山林の中となると技術的な問題があったようである。装置はピンプラグ式とマイクロ波センサー、そしてタッチ式の3種類。ピンプラグ式は木の周囲4カ所に正方形に杭を打ち、それに人間がくぐって通れない間隔でコードを何重にも巻く。そこを無理に通ろうとすれば張りつめたコードが引っ張られ、それを止めてあるピンが外れ

てテント内のブザーが鳴るという仕組みである。断線式なのでコードを切っても同じ結果である。マイクロ波センサーは、営巣木上に弱いマイクロ波を放出する機器をとり付け、その波が何かに反射して帰ってくるとセンサーがそれをキャッチしブザーが鳴る、というもの、タッチ式は営巣木にコードを何重にも巻き、それに触れる物体を感知するというものである。空を飛ばない人間に対してはこの3重方式で完璧で、電源は近くに住むボランティアの協力により充電式バッテリーを使用した。しかしこの素晴らしい装置も我々の技術的知識不足と装置自体の過敏さから誤報が多発した。当初はその度に総合警備保障の方々に来ていただいて復旧作業を行っていたが、時とともに我々も慣れ、年を経るに従い誤報は減っていった。監視方法はこの装置の他にボランティア自身の足による周辺パトロールや、林道を通る不審車のチェックリスト作りなども行なった。このパトロールも含め、活動に大いに役立ったのが無線機であった。丘陵の中に隔離され電話もない我々にとって、これは大変な味方である。ボランティアの好意により同氏の自宅を外部との連絡基地とし必要な交信を行なった。そして我々の活動は朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、FM東京、NHK総合テレビ、フジテレビ等を通じて全国の読者、視聴者に紹介され、それらの方々から活動の原動力である貴重なカンパをいただくきっかけともなった。

にもかかわらず、我々の監視するオオタカの巣は再三にわたり密猟者に狙われた。夜半過ぎに突如として警報装置が鳴り響き、ボランティア達が営巣木へ急行する、というシーンがくり返された。朝になり、ひなの無事な姿を見るとホッとしたものだが、時として白昼あるいは巣立ち後にも、嫌がらせのためか警報装置のコードを刃物で切り刻んだり、という悪質な行為が後をたたなかった。オオタカのひなを狙う密猟者はセミプロといえる。独自の販売ルートを持っているようである。彼らが狭山丘陵でタカの密猟を行うのは最近に始まったことではないから、地形を熟知しており、オオタカの営巣木を見つけることは造作ないようである。1984年は、我々が本格的な監視活動に入る前、すなわち卵の段階で密猟されてしまった。人工ふ化が可能かどうかは疑問であるが、密猟者側も技術的に進歩していることは間違いないであろう。

ひなが巣立っても、活動が終了するわけではない。何カ月にもわたり我々が行き来した山林内には、細い道ができてしまうわけだがこれも自然破壊のひとつにはちがいないだろう。こうした場所に植樹し、できる限り復元して破壊を最小限にとどめておかなければ、我々の活動は矛盾を含むものになってしまうのであり、こうした復元も我々の重要な活動

である。そしてテントを撤収し森から離れた後も協力していただいた各方面への挨拶や、カンパを載いた全国の方々への礼状送付をもってはじめて一段落、ということになる。また、その後は活動の記録をまとめたり、監視と並行して行なわれたオオタカの生態観察のデータを整理したりと、結局は1年のほとんどを費やすことになると言ってもいい位である。

86年からは、居住性最悪のテントに代わりプレハブ小屋が導入された。また、ガソリン使用のランタンは、発電機の導入により蛍光灯に替えられた。活動も年を経るに従い、ノウハウを身につけ技術的に進歩していったのである。またこの活動が次第に世に知られるようになり密猟者の行動もやや鎮静化に向かって我々にも若干の余裕ができるようになったため、未知の部分が多いオオタカの生態についての調査・研究も同時に進められている。

むすび

こうして我々は1983年から89年までの間に23羽のひなを密猟者から守ることができた。しかし我々が山の中でオオタカのひとつの巣を守り続けた真の目的はもっと遠い所にある。我々の理想は、すべての人々が自然と野生生物に対する高い意識をもち、密猟者が法律を犯しても何の得にもならない社会への転換である。タカをペットにしたいという者が1人もいなければ密猟も無くなるであろう。一步譲って、彼らの考えが変わらなくとも、世間の目が厳しくなれば彼らの行動を制約することになり、少なくとも法律が厳しく適用されるようになるであろう。また我々が守ろうとしているのは1つのオオタカの巣だけでなく、その生息に必要な自然、すなわち狭山丘陵全体であるといってもいい。我々はこう考えてオオタカの巣を守ることに力を注ぐことだけでなく、マスコミの協力を得て広く報道してもらい、首都圏に残された、オオタカの繁殖する貴重な自然の存在を世に紹介した。幸い大きな反響があり、多くのカンパが集まった。山中の監視に参加する人も増えた。もちろん今後も我々は活動を継続するつもりである。1人でも多くの方が協力して下さり、あるいは我々の活動を理解して下さることを願ってやまない。

参考文献

「狭山の森から——オオタカ密猟監視報告'83」

オオタカ密猟対策委員会編

寝ずの番38日「次は巣立ちまで」

オオタカに 愛の監視

ヒナ誕生

全国からカンパも



オオタカのヒナを確認する密猟対策委員

同委の話だと、オオタカの木の梢上三十センチに枯れ枝など巣を築いたのは三月二十一日。同丘陵の森奥のモミの

が、見つかり、長閑監視で、掘削、ふ化、巣立ちを見届けている。それでも数羽しかいない同丘陵のオオタカ。こ

とも無事にふ化、巣立ちさせなければ」と、密猟監視の四月二十六日夜から泊まり込み監視を開始。

監視に当たったのは、野鳥研究者の笹川さんら同委の五人と同委の求めで集まった

五人。翌日一日の間に泊まり込み監視。青柳市の建設会社がフレハブ小屋を飯沼場として無料提供してくれた。

照明は石油ランプなど。ガスはプロパンを使用し、水道は約一キロ離れた民家からホリ管で運んだ。

同委の話だと、四月下旬、

怪しい人物が、小屋に監視者がいるのを知ると逃げようとして走り去るなど、これまでに三件の不審な動きがあったが、いずれも事なきを得て、ヒナ誕生となった。

同委にとってありがたいのは、三月までに全国七十余人から計六十数万円も寄せられたカンパ。この中には、心附こうそで、鶴岡市に入院中の七十二歳の女性が「命を大切に育てて」と二十万円を募金してくれたケースも。

監視はこれからも続き、同委は不足分をボランティアと親善資金の協力を呼びかけている。連絡先は同委の一人、瑞穂町二本木一三四八田中勝さん（0425・57・0941）。

泊まり込み監視三十八日間のかいがあった。埼玉環境に近い瑞穂町の狭山丘陵で三日までに、オオタカの四羽のヒナがかえり、密猟監視の民間グループ「オオタカ密猟対策委」は笹川昭雄代表はホッと一息。交代で監視してくれたOしや学生ボランティア、それに全国から計六十数万円のカンパを寄せてくれた人々の協力の成果だがヒナの誕生は一つの過程。七月下旬の巣立ちまで、同委の「不眠者」は続く。



= 9 =

「密猟防止

の警備器を取
り付けます」

福生通商部に
委任して間も

ない六月初
め、狹山丘陵

で密猟、狸卵
すのオオタカ

を五十七年か
つり続けて

いるオオタカ
グループ

「オオタカ密
猟対策委員会

の田中勝義会
長とから電

話を受けた。

オオタカ

みんなで守ろう、多摩の珍鳥

自然に恵まれた前任地の
山梨・峠沢では、シイタケ

を密に野郎、シカやタヌキ

の交通事故や動物からの

の取材は珍しくなかった

が、管轄地は福生町。「本

当にオオタカが巣作りをす

る場所があるのか」と平信

半信で出かけた。

連絡小屋に入ると、突然

トランシーバーから「見な

れぬ男が林に入った、気そ

の木のこすたにあるオオタ

カの巣を盗み去られて、

流れた。監視小屋からの情

報だ。緊張感が一瞬たたよ

う。「これまで二回もヒ

えた。数は確認出来なかつ

たが、こんな所をテリトリ

すから」と対策委員の役員

に、子禽に励む。都立

にがい体障があるので、ち

派オオタカ」の生きたまに

は驚かされた。

とがらせる。

車と丘陵を走り、林の中

を歩いてたどりついた監視

小屋は戦争ゴツコの基地の

ようだった。オオタカ

たちは虫や雨に悩まされな

がら監視小屋から約三百

離れた大木に設けた狭い監

視塔は、十数分先

に、開発に追われ、密猟者

オオタカのヒナは八月に

無事巣立った。四月上旬の

産卵から約百日間にあたる

オオタカの二十四時間

監視の間に、密猟者も手が

出せなかったわけだ。オオ

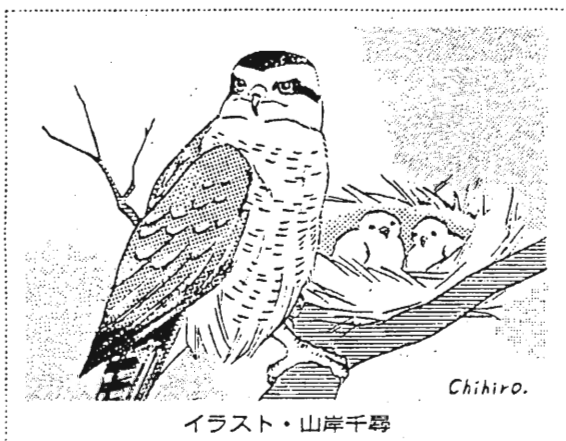
タカが狙われるのは、はく

製用などに高く売れるた

に狙われ、野生の鳥獣が死

すまま生きなくなっている

ものだった。福生町（記者）



イラスト・山岸千尋

ただ使命感だけで：

今年で
6年目 山中で日夜監視活動

さんさんと照りつける夏の
日差しが、アカマツの葉にさ
えきられ、木々を縫って流れ
る小川は生氣を失う。互いに
呼び合うツグミやウグイス、
シジュウカラの歌声。「クア
クア」とひときり目立って囀
くのがいる。西多摩郡瑞穂町
の狭山丘陵のオオタカは、今
年もかわいひ子を育ててい
る。写真。悪魔の手からヒナ

記者ノート オオタカ密猟 対策委員会

を守る。日夜、監視活動を
続けているのがオオタカ密猟
対策委員会（川口昭雄代表）
ボランティアー二人である。
五十四年、熊さんはパー
ドウォッチングでオオタカを
冬季に展望台がつがいの



確認した。五十五、五十六、
五十七年にも果を発見した
が、すでにヒナの姿は……。密
猟者に対する怒りは、これを
機に燃え上がったという。
今年で六年目になる田中勝
実行委員長は、「なんとなく
くというのが入会者の多くで
しょう」という。給料をもら
えるわけでもなく、まして熱
意を与えられるのでもない。
ただ時間、体力、お金が奪
われるだけの活動である。森
林に設置された高さ三・五
メートル、幅三メートルのビ
ールハウス。それが彼らの
ベースキャンプである。

も、この時だけは全身が硬直
しました」と長石さん。
「僕は昨年、ここに取材に
来たときに、自分の何かが見
えたと感じた。佐久間さんの説明に、テント
年もうして手伝っている。今
です」というのは、十六、七
メランの佐久間文男さん。
この日は不審者の侵入を
キャッチするためのマイクロ
ホン、果の近くに据え付け
る作業にひと役買った。果か
らベースキャンプまで三百
メートルを引くまで、一日がかり
の大仕事であった。
日が沈みかけた夕方六時、
テープレコーダーにコードが
つながれた。みんなの期待ど
うにも、長石さんの息子の卓
穂君ハコこの好奇心が騒ぐ。ヘ
ッドホンを耳に当てて左へ
さん。「何か聞こえる」。
「アレ」という叫び声
に全員、ヘッドホンを傾け
る。巨大な、黒い熊のヒッ
トを伝えるラジオ中継。テー
プまで連絡を。（大井田裕）

昭和63年 6月15日 産経新聞



オオタカの成長 ①



オオタカの成長 ④



オオタカの成長 ②



24時間監視テント設営



オオタカの成長 ③



警報装置取り付け